寛永諸家譜

清和源氏丁九冊之内

頼光流

30

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (30)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

仙石　極村
鴻田　妻木
保々　揖斐
逮山　肥田

寛永諸家系圖傳

丁七

清和源氏
頼光流
仙石
安倍ふ〻く去後の末流なり　先祖仙石氏の養子となる仙石と称す

久盛
治兵衛　法名浄義

浅草文庫

秀久

越前守　従五位下　生國義流

少年より秀吉ふつゝ武勇のすまきこの
ゆゑ漢の國ゝまゝ又あゝため
く贈故國と領ゝこれ故ありて没收
せらる

天正十八年小田原陣の時秀吉の赦免
とうけてゝ先陣の目つけとして小田原
没落の後信濃信州佐久郡小諸の城を給
ふ文禄五年朝鮮陣の時
朝鮮殿殿ゝ主ゝ出たてまつりて京都
ゝ出ゝ主田と御伺征伐の時秀久先がけ
と田城とうこゝ
同十九年五月ゝ江戸ゝ高野
四業　法名道樹

忠政

名部大膳　法中信下　生國近江

寛永六年吉田陣の時父秀久合戦なく

上田の城をうつむ

同十九年秀久死去の後遺法をつゝ

小諸の城を領せ

大坂夏陣の御陣をつとむ

元和八年上田の城をうつす

久隆

寛永六年四月廿日江戸にて死去五十一歳

法名京智

大和守　法中信下　生國信濃

慶長九年

右法院殿より法名もらる

大坂夏陣の御陣に先忠政となる

供をせ

元和二年御書院番となる

同九年

将軍家ふつゝくまつる

寛永二年御使番となる

同六年御目付となる

同十二年御小姓組の番頭と仰つけ

らる

久邦

右近　生国武州

寛永二年十一月朔日

将軍家ゟ召しまつられ

同十二年七月鈞命ふくみて御小姓組の

出番に入

政倫

越前守　法名信流

元和九年

生国信濃

右徳院殿と申しまつる

寛永五年

将軍様と申奉て

同年父の遺言とつゝくと四の城と領て

政則

織部　生国同所

寛永十一年

将軍様と申たまつる

同十八年市小姓組の市書とつとむ

政勝

采女　生国武蔵

寛永十一年

将軍様と申たまつる

同十八年市小姓組の市書こなる

家紋永樂通寶

国立公文書館
National Archives of Japan

樋村

東

新六郎　市羽守　生國三列

天文四年十二月ニ日の紀氏

清康君を宮したてまつる時新六郎

郎庄司浦七郎を誅して主君をの

ら半時新六郎十六歳

同十九年浅井其或時分其　をとよりの
廣忠と突たてまつりて御館へおもむく路
出羽守を仕のこしおかれ浅井とあひ
はかりの人ゝ相ふくしてすでに立むかひ相
を進ぜんときこえすでに堀の中まで押寄
とりふくんで堀の中まで押寄
（古老人物語つたへていはく浅井とつきたてまつるべしとおもはせ
寄こゝをもつて大逆の人なり

たゝかはせもすぐるこゝをおのく
出羽守をたすけんとせしはものとゝの
をとりすてゝ出羽守をおもはるゝ
といふべき出羽守をもつて害
せんとはかりて浅井の首を切て
堀へなげいれ人皆こゝまでと魔に成
いたく浅井をとゝろすものハおもはるゝの
家政なりとゝ云ふ
一の新法をもつてゝ同人

みくに丸人みくに八郎ひろすこの方ろ
こゝにまろす
同二十一年皆懸合義の時討死を問ふ
二十三条　法名業安

家政

新左衛門　お羽ゝ　生國同ものゝ
東照大権現ゝつゝくまもりて忠ゝ軍
功あり

家伝ゝいまゝろのこと
大権現軍配団扇をもこまりて三ヶ津の
政の字を下ゝし出ゝるゝ号すゝのとゝ
仮あ一文字の御服を与ゝ又ゝ力
三ヶ津をたけゝして御鎮市先ゝ乃
諸将ゝ列ゝ
大権現三列ゝ御座の時酒井左衛門忠次
石川昌安政成同伯耆守ゝゝ
家政四人政ゝ

天正五年十一月死去

家次

新右衛門　生國同所

天正十二年長久手合戦の時首を取る

慶長四年三十三歳にて死去　法名

宗泉

家政

新右衛門　お明の　生國駿河

慶長四年十一月歳にて

大御所様に御供仕り

駿府にて御番を勤む

同十三年従五位下に叙せ

家貞

右衛門佐

寛永七年二月

右法院殿
将軍宣旨を蒙り
同十二年十二月従五位下に叙せ
政春
市正　生國武州
寛永十二年
将軍宣旨を蒙り
同十四年正月法書院正書を授ける
同十六年十二月法橋の系図となる
家紋九曲一文字桔梗紋

国立公文書館
National Archives of Japan

泰職

帝刀　生國二引

極村

先祖ハ後ハ代々極村の里ニ
住ミ居ル沙へ氏と号ス伝ル
いつく極村氏ハ
信しらず

市者家代ニ家

清康秀はしらへ、つゝまつる安部大蔵
の子孫七郎　清康秀を害し奉る時
泰職の兄本多寺孫七郎とうんせ
杉山泰職の屋をつゝみておそく
孫七郎とうこんとふうり火き
をし孫七郎刀をとりて泰職の股を
きりはなしけれ孫七郎を突
はなしこゝをとゝ　廣忠へ
はたらへ志ゞく戦功あり

今東さこの話りのとり不泰職
とも明なると兄なわ孫七郎伏誅れ
時泰職し又こゝをふのりとゝ云
志りまとも出ある事ゝこの事を
いとなさ出ゝ本多寺と第刀の友誼
りのと

泰忠

左佐守　二位法下　生國同前

もゝじめハ僧みなゝこゝ引風来寺の別當と
なりて安養院と号ス
元亀二年三方ケ原合戦の時市川勢
ゝゝて
東照大権現ゝ志ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
郡のうちみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
天正十八年小田原陣のとき　約命ゝ
ゝゝて泰忠ゝ勝ゝ多年八郎忠勝ハ
十六歳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
城ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
迫ゝの門ゝゝ入ゝ大ゝ軍功ゝゝゝゝゝゝ
二人の勇功ゝ感ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大権現この時の賞ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の城ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大掾現ゝ志ゝ
小山ゝ
たゝゝて領地勝浦ふゝを國れ
賊徒と志ゝめんゝこめ生住と
同六年勝浦ふおゝ二千石の法加增
ゝゝこまゝて紀合五千石と領ゝゝ
石濱院殿ゝ志ゝ
同十二年
大權現

石濱院殿の命とゝて法下に叙ゝ
同十六年死ゝ時ゝ七十三歳　法名
信心

泰勝

常刀　法光院下　生國同ゝ
ゝゝ長元年十九歳ゝて
大掾現ゝ有ゝ
同五年石田三成謀反のゝゝゝ泰勝并

太閤忠勝　左命をかうむりて流刑後草
の城をせしむ時忠勝ぐんみをうしなて
秦勝光をけしうち
関ヶ原合戦の時徳川方にせて首をと
りこの時敵二人をとりとる忠勝は
をとる
大指現
法院殿へ言上しなれはかんぜ
あり

同七年
法院殿うせたまへはまつて父子とも
に勝浦の城にて生涯を
同十八年伏見の城をもつて生涯を
同十九年大坂古陣の時伏見にいつ
こもりし　左命にて安信せ家と
ともに唐海上のたさ合をとる
大坂和睦のつて古陣の後
伏見の古城をとりこむ

元和元年大坂再乱の時大多出雲守
忠朝小しきく先陣をたしむき力戦
をして首十二をとる城中夫と引ふ
搦の門まて働きを後勝山して
大接現へ出用乃しいしい時合戦のやうと
はしるゆへ泰勝うもうきのもし
きと言ふて
同五年
台徳院殿へ法へまもりて大御番
の以ておもう
同九年
将軍家へ御番
寛永十年四千石の加増をくれ
給合九千石の采地を領して
同十一年死ス 五十七歳
法名覚義

泰朝

常刀　法名信下　生國と伝

享年十八年

白川院殿

将軍家と為る

寛永九年　法名信下と叙す

同十二年　父泰時の跡を継ぐ

泰治

左京　生國武州

寛永十四年

将軍家と辞す

政泰

平蔵　生國と伝

元和七年

白川院殿と為す

寛永九年常陸の國麻生のうち竹井
村にて五百石の地となる

則泰

数馬　生國同所

寛永十二年政泰の跡領となる

故紋九曲一文字下桔梗花菓こ

国立公文書館
National Archives of Japan

植村

家信より以氏より出て初
八飯沼小弓号して飯沼八藤氏なり
ごいんなり正勝時より植村
東照大権現の命により植村と称して

●正忠

飯沼三郎右衛門　国三刑飯沼より出

廣忠に
大樹現ずしたへくまつる

正勝

飯塚七郎　生國同所
住て　横村左右馬の尉と号す
大樹現出の時正勝を召くしたへ
たくまつる時古前にて科人あり
ゝと正勝ゝめゝる時ゝ十八条の
ゝ法を定ゝ列ゝあるく天聖ゝ高麗
尉高力ゝ右馬の尉なゝびゝ正勝ゝを
行とゝゝ
正勝武功あゝ横村右馬の尉と同く
軍をゝしゝとゝゝ先にゝわ七百騎の
采地ゝくまゝわ軍士七十騎をつきゝ
右の軍士の采地にて二千貫の地を
支配す
一向宗蜂起し

大指現とおろしてまつんとまつぶき
正勝一白家ちとへとし家自を浄土
ちゝのゝめ一白家と日来合戦を
ゝして軍功あり
大指現の命をうけまいりて吉利城江
の城をとりまわこと仮演名の城乃浦書
とつかむ
三引古池縄おかく合戦のとき
矢田俣十郎敵の頭をとうちとり正勝

小刀をゝく唐こけうをきて敵と
相さうこと三町ばかりとゝとゝ
ゝまとゝみて敵をうちかゝ
元亀元年婦川合戦の時正勝後を
ひかうす
同三年味方原合戦の仮
大指現演打ちたまの時正勝家永
孫大夫内藤志右衛門常に古馬のそ
ゝ成ゝうしす付来て

三戸信濃守十五歳のとき正勝并ゟ
冨永孫太郎内藤五郎と武道ハ
事とゝ〳〵んゝめに器量へ伺候ス
天正三年長篠合戦のとき五陣ハ
戦ゝ〳〵めゝ先ゝ正勝跡ゝ立て
柵のゝへゝみ敵陣ゝ〳〵〳〵〳〵く
こゝへゝ〳〵ゝ〳〵く味方小勢ゝ〳〵方戦ゝ
決せゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ軍に先ゝ〳〵ゝ勢ゝ
ゝ〳〵敵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

同年小山ゝ〳〵ゝ〳〵陣の時　信濃守
大指現ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
ゝ〳〵敵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵方正勝ハ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵の人数ゝ引ゝ
同九年高天神落城の時正勝ゝ勢ゝ
引ゝ〳〵敵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
同十二年長久手合戦の時正勝先陣ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵て敵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵味方
引退ゝ正勝ゝ〳〵ゝ軍のゝ〳〵にあゝて

敵をうつ

同十四年

大指現後府より濱松へ入御の時正勝

濱松城の警衛をはる

同十八年小田原陣の時正勝兵柄の

城をもつて秀吉の命をうけること

ひつの在小田原籠城の時秀吉いうして

大指現に告たまふ兵ふたりて冥加

出入國の時来地をうけ

文禄元年相列して死五十八歳法名

道覚

正元

庄義　生國三河　法名源心

三列

大指現を辞して

天正十九年領地をうけ

正相

左兵助　生國同所

大捨現より兄正元の領地をとりまもり

寛永五年冬原合戦に伯父を

右法院殿へつくへく大合戦をはらむ

仕りて出家をゆるさる

同十六年病死　二十八歳　法名若と

正相

左二郎　左右衛門尉　生國武州江戸

寛永十四年十一歳にして

右法院殿へ参り

元和三年相模ふちわて大合戦

をつとめ

正真

主殿　生國同所

寛永九年十歳にして

将軍家と為て
同十八年より大坂表をつとむ

正村
庄六郎

正武
庄七郎

正良
久五郎

正次
五郎右衛門尉
右徳院殿へ仕へ
大坂陣にて伊達方と
将軍家へ
つかふ

正光

孫右衛門

寛永七年

将軍家ゟ為

正信

三四郎

寛永十二年

将軍家へ為渇

家紋丸内一文字こ刻

国立公文書館
National Archives of Japan

篠田

頼清

左兵衛尉

頼康

大膳大夫

嘉吉元年十二月廿五日暴殺

瑞岩ふおめく死す 系七十

滿貞

織田伊豫守

某

某

十兵衛尉　生國參列

天文十六年四月十八日參列畠山尉

中ふおめく　廣忠卿ふうむしくもの

あり所ゝ十兵衛　廣忠卿ゝつくく

城中ふあつく敵とおたうつく悔

下ふおめく討死

某

右京亮　生國同ものの

壮年の時戦場ゝおめく　右手を疵

ばくしゅへ与力として参ること
三方原の合戦に浜松の城の留
さとう方たまりにて武列坂戸
おのく病死八十九歳　法名永源

重次

次兵衛尉　生国同前
東照大権現ふつゝへたまる
天正十年沛足軽二十人をあつ
かへる
同十八年又沛足軽二十人をくゝへ
たもつ組合五十人
寛長十九年大坂陣旗奉行
をつとめて仕ます
寛永十四年武列坂戸おのく病
死九十三歳　法名祐栢

成重

右京亮　生國武州

大指現ㅈつゝくもすぐる

成重弱年の時人と口論して其りのを

きろすゆへのまこと紙前ゝゆきて

中納言秀康卿同宰相忠直につゝく

寛永二年めされく

白洲院殿と申し　御前おゐて

諸名十人　讀鉢是時二十人をあづかる

同二年清ゝ院の時供を京都おゐて

病死ㅈ年一歳

亟沢

出羽守　生國武州

父成重ゝ忠直ゝつゝく

成重死ㅈ後寛永四年ゝ

出羽守ゝ

白洲院殿ゝ清ゝ院ゝ

清書をたゝく御小姓組

直正

彩三郎　生國越前

寛永九年十月朱印ヲ以て

将軍家ヨリ賜ル

同十五年清書院書ヲ以て

直時

清書院番　越前守　生國冬月墨湾

大猷院様ヨリ

天正十八年小田原城の時供奉

同十九年奥州城列城ヲ

文禄元年名護屋城ヲ供奉

慶長五年関原城の時父主従ヲ

あづかる足軽五十人ヲ引かへ供奉

同七年清洗炮足軽三十人あづかる

同十八年甲斐國中の事ヲ仕る

同十九年元和元年大坂夏の陣ヲ

仕方

元和二年

台徳院殿の仰をかうむり主次ふあづけ

たまふ鉄炮名人五十人をつづる

同五年大坂所司代

寛永二年正月朝日左五位下に叙せ

らる

同四年和泉堺の奉行職をかゝ

ゆる

同五年十月廿日死す時に五十九歳

主次

刑部少輔　生国武州江戸

元和七年召しめく

お草ものつかへまつる清左衛門の古小姓

こたりの時に十三歳

寛永元十二月晦日法名仰下て

叙す

同九年将軍佐渡守親成ノ組ヲ
ヲ以テ御書院番ヲツトメ又御番
書ヲ勤ル

時卿

孫右衛門尉　生国武州江戸
将軍家ヨリ召ヘシ
寛永十二年十一月大久保右京亮
ヲ以テ御小姓組ノ御番ヲツトム
時ニ二十九歳

利氏

庄五郎　生国武州
右徳院殿ヨリ召ヘシ
当長十三年御使番ヲ勤ル
同十七年武州江戸ヲ御番ヲ
時ニ二十九歳

利正

彦四郎　次兵衛　生国同所
右徳院殿ヨリ召ヘシ

寛永五年小山陣屋より高田陣に
移す
同九年浅野使者として
同十三年浅野幸長死去あづかれ
同十八年江戸の所なりと修理亮
寛永二年正月朝日従五位下に叙し
弾正少弼に任ず
同十二年浅野とかう姻の刺繍
たゝく也と号す

同十九年九月卒す年七歳

重利

庶子
武州江戸生れ
右虎院殿より
つとめて浅野水藩を
相続
つゝまく兼岐樹津
組に浅野小姓組にくらされ

従清和源をつとむ

利世

兵四郎

左近院殿に従へまつる

寛永六年九月父利正に先立て死す

歳廿五

利宣

八郎左衛門

寛永八年

将軍家に拝する

利喜

兵四郎

寛永十七年

将軍家に謁する

利春

泳一郎　高林河内守　系図別にあり

利本
久太郎　生国武州
寛永七年　七歳ゟ
将軍様へ奉公
同十七年ゟ小姓組の番をつとむ

利直
右近
寛永十八年九月
竹千代様へ奉公

同廿年三月ゟ番をつとむ

利近
長三郎

女子
福田彦兵衛妻

女子
加藤彦太郎妻

女子
土屋忠兵衛妻

国立公文書館
National Archives of Japan

伯王

妻木

頼光より十代古後頼貞ら後亂妻
木ゝて居住て妻木の称号と
なる頼貞より妻木伯王て
ゝて中絶と

某

多部太浦

某

中務

某

源二郎　板右衛門

天正十年明智日向守光秀城ヒのゝき
板右衛門江州坂本西境寺ニ立わく
自害す光秀ハ伯父ゝるふ[illegible]
時ハ十九歳　法名宗志

貞徳

武ハ貞行と以　源二郎　信長公
母ハ水野下野守姪
織田信長ハ馬廻の役をつとむ

のち安督と頼忠小山にて妻木に居て
元和四年死す七十五歳　法名偉入

頼忠

長門守　従五位下
名護屋殿にて法へ入まつる
元和九年死す時に五十九歳　法名
宗鉄

頼利

檜原の
慶長五年人質として駿府に下向の
所器部にて
大坂現在にたゝかひまつる江
戸へくだる
同六年閏月江戸を出まつり妻
木に二万石領とくだる

同十四年より

之徳

[illegible]

文禄二年牧野市右衛門尉と云て

大指現と有たくまつる古母堂の居たる

[illegible]年之板景勝叛逆と

大指現こまと云退治のため古数向の時

小山もたくゝ供をすまつる石田

治部少輔三成と方ゝ別りてむしん、

岩村の城主田丸中務具安すかたに三成と

くゝすす岩村八妻木れをたち又高山の

城をおもくゝ三成くゝすすを時貞徳頼

貞士卒をひきさのくゝ合戦し勝利を得

て首級五十と討とり小山へ注進した

くもつる時

大指現東義流の騒動とおぢつるくばめ

さし之徳と母相勤今と一のいうへらゝ妻木

又ひたちの山時高山の城を攻たり

東義澄を志賀に

大接現関原へ出馬の時之進恩賞をて

出迎まもりをしたりをす

同十九年元和元年大坂安度の出陣

又供をす

永徳

[illegible]

重吉

元和八年

将軍家を奉てまもる

長右衛門

廿年の時森長俊を忠政の所にあつ

のり　忠吉に又

大接現ふつへてまもる

法名宗淳

重直

伝兵衛

大指現

右法院殿

将軍家ゟ御ゆるし

重門

平十郎

将軍家ゟ御ゆるし

家紋桔梗

国立公文書館
National Archives of Japan

則康

民部

保

保々たるめる鶯巣と号す保々
そ古波の怪流ちわ古波大膳大夫
新康その孝義流を頼世こそ子
右馬授以て康が子孫ちわ数代
中絶

天文のころ古河藝頼英流國と没落
の後則康浪人となり杉山中務ふ
おもむき子男細川右馬頭が妻子と
なりて細川と号す
天正八年霊陽院義昭と信長と不和
なりて則
康も伊勢國へ引籠ふ保く
滝川左近一益が家臣保く勘兵衛中左衛門
所へ浪人ありて居住す勘兵衛中左衛門を

則康が兄なり
同十年六月十九日小條氏政と滝川
一益と武蔵野ふ於て合戦の時
則康も一益に味方して討死す
三十八歳

則貞
長兵衛
十余年ありて父が召へ入ありて浪人

世ちかふかすわ鷲巣たゝひふ細川と
あゝためゝ保ゝと号すそほれ引へ
ゝ加賀肥後守清正が子息加賀守
ふ家ゝ名跡へ浜海ゝ四ケ年
あゝて改綱す
大捨現則貞が先祖と志ゝめゝし
則康勇敢の事と申ゝ津田
小平次ゝ御弱あゝ
寛長二年ゝめゝ

貞廣

石見守
寛永十一年八月一日長崎下に叙し

貞弘

左門

家紋水文（いへのもんこうづいろ）

桔梗（ききやう）

国立公文書館
National Archives of Japan

揖斐

義濃國土岐
頼雄法名祐禄ノ後裔

政延

兵部少輔　法名性圓
尾刑羽栗郡高須の郷を領す

頼近

長谷川播　法名素玄
奈良の郷士

詮政

長谷川播　法名京圓
奈良の郷士

政勝

与右衛門　法名二休
居所同前

政雄

与右衛門　法名全松
織田信雄ふ法　居所同前

政宗

与右衛門　法名如天

天正十二年長久手市合戦の時

東照大権現市馬を政雄の領地ゟ召

たまふ此ときに政雄の姓名を

きこしめさる信雄おもてのち

大権現政雄の事をたつねたまふ

いつくにすくに死去のよし申され

政雄の子はいつくにかくれたるや

しとき政宗城尾帯刀を遣はし

きこしめさる奥方の間を野

周防に沢して

大権現と称したまふ時家老

たり

政吉

本右衛門　法名長伯

寛永七年
紫宸殿と称したまふ

政軌
中右衛門
将軍家へ仕へたまふ

政綱
与右衛門

寛永九年
将軍家と称したまふ
同十二年御小姓組の任務を勤む

政均
五郎兵衛
寛永十年
将軍家と称したまふ

国立公文書館
National Archives of Japan

改紋桔校

国立公文書館
National Archives of Japan

徳山（ここのくのやま）

貞信（さだのぶ）

二子古墳（ふたここふん）　生国法印（しょうこくでうしう）

貞長（さだなが）

七郎二子印

貞次

二〇〇石藩　本姓　生國同前

貞輔

二〇〇石藩　生國同前

貞孝

名庫　生國同前

九十三歳にて死す

秀現

五名藩　二位法印　生國同前

寛永五年

東照大権現と奉[illegible]

同十年四月　台命によりて法印に叙す

同十一年十一月廿二日病死時年六十三歳

重政

五万石　土国加賀

享保十一年四月

大御所と称す

同十九年大坂陣に供奉

寛永八年

将軍家の命により布衣と称す

同十一年二月二日病死時年六十六

重政

五万石　土国筑前

寛永八年

将軍家と称す

家紋地紋の丸

先祖の家紋八桔梗なりと云へとも

国立公文書館
National Archives of Japan

現（あき）時（とき）うつて地蔵丸（ちあうまるの）にあらたむ

国立公文書館
National Archives of Japan

肥田

時正

生国尾州
三宅家家来
寛永三年
東照大権現と奉
大坂奉行の御使

大擅規蒙御のうち
白藤院殿へ御くまりう
元和九年七十三にて病死

正勝

生國武州
寛永元年
白藤院殿へ御てまりうを投
将軍家を毒湯にて

同十一年八十三にて病死

宗勝

生國同所
元和六年
将軍家へ御たくまりう
寛永十二年より
御軍へ御くまりう

改紋桔梗（いへのもんきこまつう）

国立公文書館
National Archives of Japan

肥田

●忠直

河内守　七國英流

忠政

玄蕃允　七國同流

位ちゝなる　秀吉ゝ流

忠親

立花 上國同前の
金森法印小屋に法印死てのち
寛永十七年正月
大御現り おされ
台徳院殿
将軍 安まてたてまつる

忠頼

木下侍 上國同前
寛永元年十一月廿八日
台徳院殿と 有 謁 て
同四年正月御小性組の内番をはたす

安紋 鹿酸草

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan